

機を捨てるとは

甲 「先生、お説教を聞きますと、わが機を棄てよ。わが機に目をつけるな、とつねに聞きますが、今日の講演では『自己』とか、『わが機』とかを知れ、という意味の言葉が多かったようですが、いったいどうなるのですか。」

乙 「それはどちらもほんとうです。」

甲 「それはまたなぜですか。」

乙 「ふつう機という言葉に二つの意義があります。」

それは捨機托法……の機と

信機信法……の機と

機法一体……の機と、この三種の機であります。

捨機托法、すなわち機を棄てて法に托す。その場合の機は『はからい』であり、『自力』であつて、捨てねばならぬ機であります。

信機信法、すなわち機を信じ、法を信ずるという場合は、いわゆる二種深信で、信法とは如来の本願を聞いて信ずること、信機とは、その如来のみ光によつて、わが機を知らしめられることで、その場合の機とは、罪悪煩惱の機であります。この煩惱の機は棄てようたつて棄たりません。いいえ、これをなげやりにするからいけないので、これこそ如来の活躍する舞台なのです。

有名なる善導大師の『自身は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し、常に流転して出離の縁あることなし。』との仰せのごとく深信するのであります。これは如来に照らされたるわれであります。

第三の機法一体の機とは、すなわち南無阿弥陀仏の南無のことで、衆生の信心であります。衆生の信心と、助ける如来すなわち阿弥陀仏とは、一体であるというのであります。如来の廻向によつて、衆生の帰命の心、南無の信心が生まれますので、助ける仏と信心とは一体だということです。この場合の機も捨てる機ではありません。」

甲 「それでよくわかりましたが、その二つの機の関係はどうなるのですか。」

乙 「捨機托法……の機を棄てようと頭からかかるのが多くの同行ですが、それは灯をつけなくて闇を去らせようとするようなもので、できないことです。まず、如来の勅命を聞くのです。そうすると如来に帰命する信心が生まれます。それが機法一体の信であります。この時、自分のはからいの機はすたるのです。そうしてその信心の内容がすなわち二種深信であります。すなわち如来が信じられ、わが機が信ぜられるのであります。」

甲 「お話はわかりましたが、私にはどうも信心がいただけません。如来も疑いませなし、わが機の罪業も信ぜられませんのに……」

乙 「さあそこです。如来は疑いませんが……と如来を左にかたづけ、わが機は悪人凡夫ですと……右にかたよせておいて、さて空手でここで『信心』を作ろうとする、その信心こそ、捨てよと言われる自力のはからいなのです。」

甲 「えっ！ これがはからいですか？ ……そうですか。」

乙 「そうです。如来とわれとをのけておいて、言い換えると、信ぜねばならぬ如来とわれとを棄てておいて、棄てねばならぬものを作ろうとするのが自力です。如来とわれを一体につなぐための糊を信心だと思っているのです。糊でかためたものは、いつかははなれてしまいます。如来を殺しているのです。盲にしているのです。」

甲 「まことにそうでしたね。そうすると、どうすればいいのです。……」

乙 「もつと真剣に如来を聞こうではありませんか。信心とは衆生心である前に、如来のものです。言い換えると南無阿弥陀仏のすがた全体が『信樂』なのです。如来心の全体が『信樂』であることによつて如来は如来となるのです。如来のみ心の全体が『信心』です、疑蓋のまじわることなき信心です。それがそのまま衆生の往生の全体です。ですから聖人はつねに大信海なる言葉を使つていられます。如来心が大信海です。その大信海がそのままわれらの大信心なのです。」

甲 「すると、このままですかるのですか。」

乙 「その如来の大慈悲のままにたすかるのです。寸毫も我心を添えずに、南無阿弥陀仏の全体がたすかる全体です。南無阿弥陀仏があなたの救いの全体です。安心も信心も勅命も、大慈悲も、智慧も、正定聚も、滅度も、一切この南無阿弥陀仏一つよりほかないのです。」

甲 「南無阿弥陀仏一つだと聞くだけですか。」

乙 「まだそんなことを言っていますか。それはどこまでもすべてを横目に見ての遊戯です。ではないのです。南無阿弥陀仏が、如来の全体、正覚のすべて、慈悲も智慧も、信心も安心も、この南無阿弥陀仏一つの中にあるのです。南無阿弥陀仏があなたの往生の全体なのです。」

甲 「ああそうでしたか。やれやれ長い間バカいたしました。（念仏）」

乙 「救われたとは、南無阿弥陀仏の中にわれを見出さしていただいたことです。いい仏凡一体の救いを信知するのです。火と炭です。一つ火がそのまま炭であり、炭のままが火です。あなたが南無阿弥陀仏の主になるのです。それが機をすてて法にまかした信のすがたです。」

甲 「では南無阿弥陀仏は更生した者の人格内容です。」

乙 「そうです。恵まれたるわれの本質絶対価値です。」

甲 「ありがとうございます。」